

春作業を分散・省力化「初冬直播き栽培」に反響

10月中旬から1月上旬ごろに通常の倍量の種もみを直播きし、翌年春に出芽、その年の秋に収穫する「初冬直播き栽培」。種もみは春に播くものというこれまでの考え方を根本から覆す新しい発想の技術だ。根拠が大きく進む担い手にとって、春作業の分散や省力化につながるなどメリットが多い。昨年、今年と本紙で紹介した際の反響も大々へ、注目度が日に日に増している。今年状況を追った。

4年前に導入し現在90%
新潟・上越市 穂海農耕
井藤さん(左)と
佐藤さん

冬に作業できるのは大きい

ポイント 種子コーティング、深度2センチ程度の浅播き

新潟県上越市で水田約2000haを経営する穂海農耕は、90%がこの技術を取り入れている。同社が預かる田は南北10キロ、東西4〜5キロに広がる。播き取り入れる中で、作業がほとんどない冬に播種を済ませられるのは大生品種を主に10品種作付

取り組み面積を増やすために試行錯誤している。こまめに説明する。すでにV溝直播きと落水直播きを併せ2センチで取り組んでいるが、その作業時期ともかぶりにくい。

同社とともに実証を進める農研機構中日本農業研究センターの大平一さんは「播種前の地層刀向上と春先の過剰な土壌水分回遊の観点から、収穫後に経験明果を施すのもよい」と解説する。



11月下旬に播種



雪の下で越冬



4月下旬に発芽し始める



6月中旬、畦畔から雑草の侵入も見られることも



7月中旬の生育状況



9月上旬の刈り取り前。移植と収量が変わりのない年もある

課題は除草対策、乾田直播と同様に防除を

大規模化には移植・直播のバランスが大事

課題は除草対策だ。防除方法は通常の乾田直播同様、①出芽前に非選択剤除草剤散布の②入水直前にクリンチャーパーM E液剤散布の③入水後初期除草剤や初期中一発剤、後期剤を1〜2回散布が基本となる。

そのためには移植と直播の割合のバランスを考え、普及に向け、大平さんは「真冬でも土中温度が氷点下になりにくい平場向き

大平さんは「真冬でも土中温度が氷点下まで下がるのが少ない平場の多い新潟県に向いている技術。担い手の負担は年々増している。技術を確立し、普及につなげた」と話す。

多くの地域で50%以上の出芽率

温暖な地域は早すぎる播種に注意

同技術を開発した岩手大学農学部の下野裕之教授によれば、地温が氷点下を大幅に下回ると種は死ぬが、種が0度以上には保たれることが多い。温暖な地域では播種が早すぎると秋に出芽し、冬に枯れるので、注意が必要だ。播種量は北海道で10kg当たり20g、東北や北陸で同10〜15gを推奨。関東地方でも導入できる。大豆や麦に

使う播種機があれば新たな設備投資も基本的には不要だ。品種も限定しない。下野教授は食料安全保障の観点からも主食である米の安定的な生産は重要とした上で、「初冬直播きは、品種を選ばず、今ある装備で簡単に始められる技術。規模拡大が進む担い手が10〜20年後も安定的に稲作をする上で、選択肢の一つにしてもらえれば」とPRしている。



普及に向け、初冬直播き研究会を立ち上げホームページ(2次元コード)で情報を公開している。